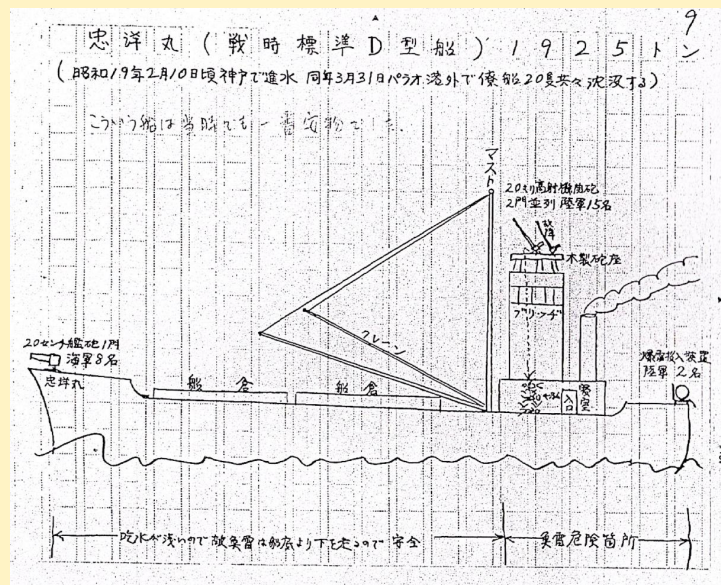


68 年間砲弾破片を体内に保持して生きた 旧日本陸軍最下級兵士の見た戦争

島影 美鈴



JSA e マガジン編集委員会 発行

まえがき

2012 年 9 月に 92 歳で死亡した実父、岩崎清は、赤紙で招集された旧日本陸軍の最下級兵士でした。昭和 19 年 3 月のパラオ空襲で受傷した砲弾破片を多数、体内に保持したまま、この齢まで生きた訳です。死亡直後に撮影された全身レントゲン写真、火葬後に見付かった砲弾の写真と、受傷時の模様を生前、1994 年、74 歳時に手記にしてあったものをご紹介します。

昭和 19 年 2 月、当時でも一番安物だった戦時標準 D 型船^{*1}、忠洋丸（表紙）の初航海でパラオ諸島に派兵されました。当時パラオは、国際連盟の委任統治領で、コロール島には連合艦隊司令部があったのですが、3 月 29 日夕方、この武蔵を旗艦とする連合艦隊があつという間にいなくなり、翌朝早朝から、米空軍の空襲に見舞われました。この日、1 日で延べ 1500 機が、空が暗くなるほど舞い、広島を出るとき、これで 2 ヶ月は戦ってこいと言われたタマを僅か 1 日で使い尽くした。幸い海軍から、広島で受領した量の 20 倍のタマをいただき、翌日の米軍空襲に応戦しましたが、9 時 30 分に直撃され、全員が吹っ飛ばされました。自分の上に吹き飛ばされていた人の血がポタポタ当たるので気が付いて這い出したときには、左半身が利きません。その後、死者の救命胴着を着て海に飛び込み、出血のためにたびたび意識を失っていましたが、同じ船の船員が、「眠るな」と声をかけ頭を叩きながら、近くの無人島に避難させてくれたらしい。包帯交換 50 カ所に及ぶ重傷を負ったが、一命を取り留めました。

本書の構成は、「父の手記」と「父がこれを書いたとき、私が質問したこととその答え」からなっています。

68 年間砲弾破片を体内に保持して生きた

旧日本陸軍最下級兵士の見た戦争

島影 美鈴

はじめに

父、岩崎清は、2009 年 12 月に自宅室内で腰椎圧迫骨折を起こし、酷い腰痛を訴えたため、腰椎のレントゲン撮影を受けました。私は、現在、和歌山県内の国立病院に勤務する医師ですが、このレントゲン写真を見たとき、多数の金属片が腰部に散在しているのを見て、体の他の部位にはもっと多くの破片があるのではないかと感じました。というのは、私が子どもの頃には、父は左手が不自由で茶碗を持ち上げることができなくて、左掌を上向きにしてこの上に右手で持った茶碗を載せていましたし、小学 2 年生時（昭和 30 年ころ）には、寝たとき、座ったときに痛む場所にある砲弾破片を除去する手術を受けたこともありました。この後、自宅で布団に入って、「ああ、楽になった」と言ったことも覚えています。

父は、腰椎骨折後は寝たきりになり、自宅近くの病院に入院していました。2012 年 9 月 18 日未明に心肺停止状態で発見された後、私は病院長に依頼して、父の全身レントゲン写真を撮ってもらいました。写真は 10 枚ありましたが、どれにも多数の金属破片が写っており、(図 1-10)中でも、上腹部には直径 2cm くらいの丸い金属塊が見られました(図 3)。父は多分、こんなに大きなものが体内に残っていることは知らなかったと思います。火葬後に、その部分を探してもらいました。小さな破片は棺を留めてあった釘などとの区別ができなくて、砲弾破片とは特定できなかったのですが、この大きな金属塊は、高温の火炎で割れ、変形していましたが、骨に比べてずっしりと重く、砲弾の成分が鉛だということが実感されました(図 11)。



図 1 : 父のレントゲン写真、頭部



図 2 : 同、胸部



図 3 : 同、腹部、
右上部に球形の金属塊が見える



図 4 : 同、大腿部



図 5 : 同、膝から下腿



図 6 : 同、両足



図 7 : 同、右上腕



図 8 : 同、左上腕 尺骨上部に 2 つの破片。
このために父は左手が少し不自由だった。



図 9 : 同、右手



図 1 0 : 同、左手（前腕尺骨に重る）



図 1 1 : 火葬後に父の上腹部から見付かった金属塊、図 3 に写っていたもの

私はこの金属塊とレントゲンフィルムを立命館大学国際平和ミュージアムに寄贈しました。その時、父が 1994 年に、当時中学 3 年生だった私の娘の夏休みの宿題「戦争体験を家族から聞いてくること」に協力して書いた手記のコピーも一緒に持参しました。それを紹介させていただきます。



父の手記

本籍及び現住所 和歌山市紀三井寺 1142
岩崎 清 大正 9 年 8 月 9 日生

私は島影渚の母・島影美鈴の父、つまり外祖父です。昭和 13 年、和歌山県立工業学校（現、和歌山県立和歌山工業高等学校）応用化学科卒業後、南海化学工業に勤務（勤務中に陸軍に召集される）、その後も和歌山市内の化学工場に勤務して昭和 50 年 8 月に定年退職。以後、文字通り晴耕雨読の生活ですが、実のところは 2 匹の犬の相手と、西国第 2 番札所紀三井寺の参与と 7 人衆という世話人に多くの時間を使っており、畠はいつも草ぼうぼうです。

さて、この夏休みに入って渚より、戦争の話を聞かせろ、それを聞き書きして宿題提出するのだとのことですが、何しろ戦争に全然縁のない新人類ですから、説明が難しく、とうとう手記とやらを書く羽目と相成り、目下それで悩みに悩んでおります。

戦争といえば、私、生まれてから 25 年間はずっと戦争と共に生活していた様なもので、まず物心のついた幼児期は毎日のように祖父にせがんで戦争の話を聞くのを日課にしており、それは日清戦争、日露戦争の手柄話でしたが殆ど忘れております。その後は満州事変を始めとする一連の戦争、それぞれに沢山の思い出もあり、要するに、戦争は私の青春であった訳です。今回は軍隊で最後に乗船した忠洋丸のこと、特に、昭和 19 年 3 月 30 日、31 日、2 日間の米空軍^{*2}のパラオ大空襲のことを少し詳しくお話することにします。

忠洋丸は進水したばかりの初航海でした。エンジンが船尾にあって前の方の大部分が荷物を積むようになっており、エンジン部分以外は魚雷は船底よりも下を走るの、敵の魚雷攻撃には強く安心でした(図 12)。軍備は船首に 20 センチ艦砲^{*3}一門でこれに海軍から二等兵曹以下 8 名がついており、船尾には爆雷投下装置一基あり兵員 2 名一基あり兵員 2

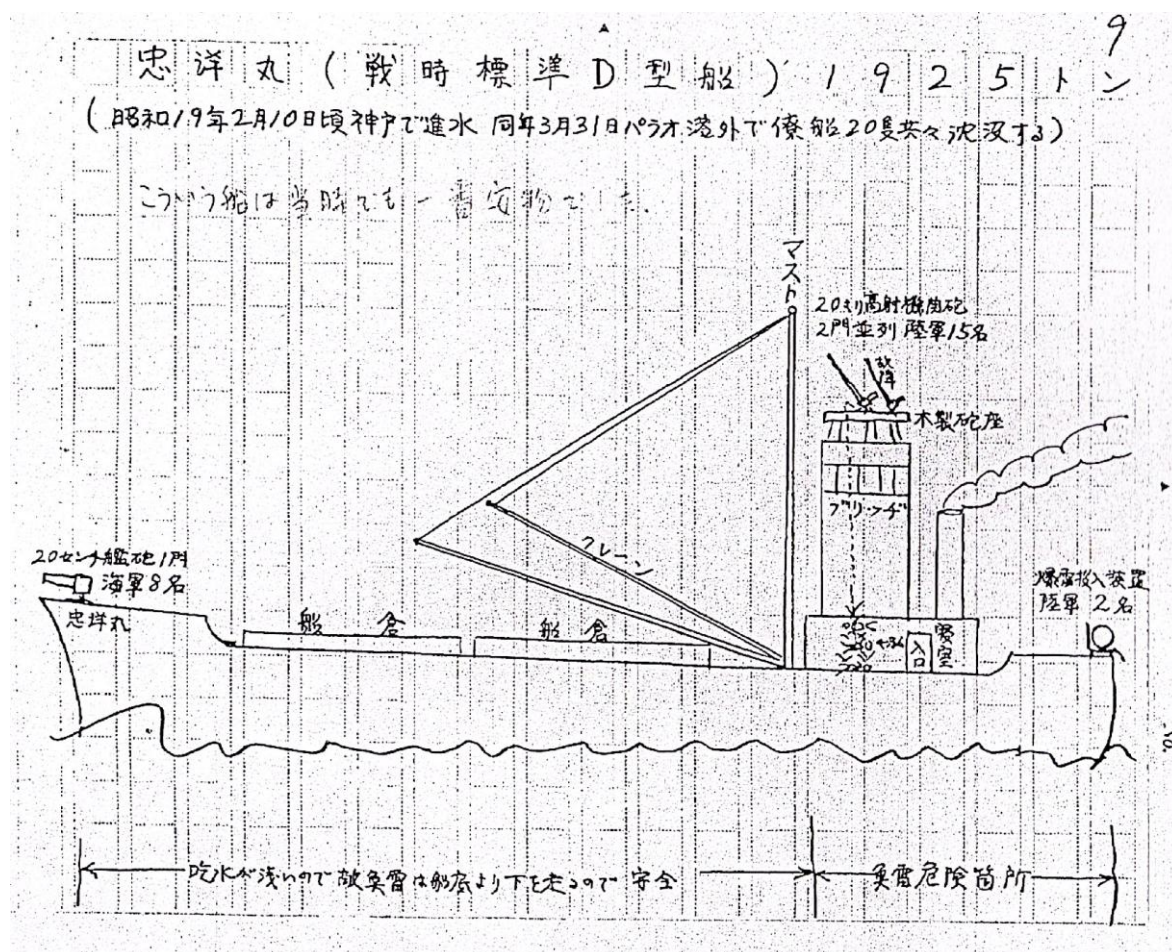


図 1 2 : 父が描いた忠洋丸の絵^{*4} ^{*5}

名で当たり^{*6}、ブリッジの上の木製砲座に 20 ミリ高射機関砲二門が並び、我々暁(あかつき) 2953 部隊(船舶砲兵第一連隊)高射機関砲中隊より木戸見習士官を隊長に 15 名が配置されておりました。昭和 19 年 2 月 19 日乗船し^{*7}、北方アッツ、キスカ両島の転進^{*8}を応援する事になり、上下毛皮にくるまれる重装備でぬくぬくと門司へ着いたら、急に、船が小さくて北方には無理と、5000 トン程の大きな船と交替。我々の防寒衣料は総て取り上げられ、代わりの半袖の夏衣料に震えるばかりでした。ずっと後で聞いたのですが、その時に交替してくれた仲間たち全員、

船もろともキスカには着かず、不明のまま戦死の広報が出たとか*⁹。あの時、防寒衣料に大満足で出発した顔が今でも忘れられません。我々は高雄へ行き、そこで船団を組みなおし食料を満載して、輸送船 2 隻に護衛艦 5 隻付いてニューギニアへ向かうことになりました。輸送決死隊に編入され、恩賜の酒タバコをいただき白鉢巻を締め、お互いに顔を見合わせ最後の時が近付いた思いに胸がぎゅうと引き締まるのを感じました。

港の名がはっきりしないのですが、ニューギニアのその港の遥か沖合いに着いたら、米空軍の猛爆で近寄れなくて、パラオへ引き返したのが 2 月 27 日。決死隊も一応解除され、積荷を全部揚陸し、次の命令待ちでしばらくのんびり。

パラオは小さなコロール島（国際連盟の委任統治領であった南洋群島の役場[南洋庁]、連合艦隊司令部のある大きな白い建物や、これも大きな無電基地があった[この島には多数の日本人が居住していた]）と大きなパラオ本島、それらを取り囲む無数の小島をぐるりと丸く珊瑚礁が囲んでいる楽園の様な所です。大戦艦武蔵を旗艦とした連合艦隊が大集合しておりました。珍しいのでカッターで見物に出かけ、武蔵に近寄り過ぎたのか、警備艇に追っ払われました。

3 月 29 日夕方、急に連合艦隊が動き出し、あっという間に居なくなり、後に残ったのが、駆逐艦や足の遅い工作艦*¹⁰、油槽船[タンカー]などでした。暫くして空襲警報が発令されました。何でも、米機動隊が大挙して襲撃して来るとの事でしたが、肝心の我が連合艦隊がすっかり姿を消したのだから、まさか来ないだろうと話しましたが、準備だけはしておこうと、全員暗くなるまで走り回りました。

翌 30 日午前 7 時丁度、南の水平線上に米艦上機 2 機現れた途端、我が軍の下駄ばきの艦載機*¹¹ 5 機も出撃して段々に近付きながら派手な空中戦を展開して米機 2 機ともに撃墜してしまいました。思わずバンザイと叫びましたが、この大空襲中に友軍機を見たのがこれだけでした。

午前 7 時 30 分、記録係によると 150 機の大編隊、頭上に展開してそれからはもう、撃つはうつは、砲身が赤く焼けそれを石鹼水で冷やす間小休止するだけの激しさで、一時はもう駄目かと思われたが、何とか危機を脱して午後 6 時に敵機は総引き上げしました。戦友もやっと笑顔で何か話かけて来るのですが、これまた不思議、全然聴こえないのです。一瞬困った事になったと並んだ顔を見ると全員がそれなんです。経験者によると、これは余の轟音で俄かツンボ[ママ]になったので、静かになる

とそのうちにぼつぼつ聴こえて来るとの事で一安心。暫くしてその通りになりました。

急に空腹を感じたはずで、朝から何も食べてなかったので、やっと遅い食事を済ますと、気になるのが機関砲のタマ残りゼロ。広島を出る際、これで2ヶ月は戦って来いと言われたタマだったのが、僅か1日でゼロになるとは、と暗い気持ちで居ると、幸運にも、船首の艦砲のタマを補給に来た海軍さんが「陸軍さんよ、タマはあるのか」と尋ねてくれたので、ゼロだと答えると、それは気の毒だと、有りったけのタマを置いて下さいました^{*12}。その量は広島で受領した量の約20倍。皆、小躍りして喜びました。

翌日、昭和19年3月31日午前7時、時間かっきりに敵大編隊現れ30分後には我々の頭上を乱舞。我々も必死の応戦。何しろ昨日は常時150機が空が暗くなる程に舞い、一日延べ1500機が来襲したそうですが、多分、今日もその通りでしょう。暫くして隊長が胸を一発機銃でやられて即死。砲手1名も大腿部をやられる。どちらも貫通銃創でした。また、隣の機関砲が遂に焼け過ぎて発射不能となり、近くで応戦していた艦船も数が少なくなっていて、益々我々への攻撃が強まり、遂に午前9時30分、小型爆弾を隣の動かない砲に直撃され、全員が吹っ飛ばされました。幸い私は海まで飛ばされず、1m程の狭い通路で一番下に1名うつ伏せに、その上に木片が1m程重なり、私がうつ伏せに、更にその上に木片が50センチばかり重なり、その上に1名が仰向けになっておりました。眼鏡も時計も無くなっていたのでどの位の時間が経ったのやら、最上段の人から流れる血がぼたぼた当たるので気がついたのか、上下に声をかけたがどちらも返事なし。やっと木片の間から這い出したが、その時はもう左半身が利きません^{*13}。側の寝室で予備眼鏡を出し、新しいフンドシで手と咽喉の出血のひどい所を巻き甲板に出ると、分隊長が両眼血だらけで立っており、「眼が見えない、片方僅かに見えるようだが。弾薬箱に火がつくと危ないから反対側に回って、早く飛び込んで船から成るべく離れよう。」と誘ってくれた。しかし、泳ぎに自信がないので先に飛び込んでもらって、死者の救命胴着をはずして着用し、余に咽喉が渴くので何かないと見ると、飯盒があったのでその蓋で自分の咽喉から流れ出る血を受けて何回も飲みました。入院後、軍医さんに話すと、多分君はその蓋で2杯半は飲んでるよ、大変良いことをしたと感心されました。もし飲んでなかったら上陸までに死んでいたそうですが、私にとっては咽

喉の渇きが癒された上、なかなかおいしかったと思っております。こうして忠洋丸の最後の退船者となり、上陸までに随分と苦勞もあったのですが、それはまたの折にします。

私の傷病名は左前ばく[前腕]骨折貫通銃創兼両大腿左側顔部爆弾破片創（1等症）で、第4款症に査定され、傷痍軍人として僅少ですが恩給もいただいて、会のお世話もさせていただきました。

高射機関砲隊15名は、戦死9名、重症4名、軽症2名でした。

[]内は筆者の加筆です。



父がこれを書いたとき、私が質問したこととその答え

Q：船には総勢何人が乗っていたのですか？

A：軍属という小学校を卒業したばかりの子ども20人ほどと、その指導者の軍人1人、船の乗組員約30人、兵士25人。軍属の指導者は子どもたちをよくかわいがっていて、要領の良い人だった。空襲が始まった時、子どもたちを船底に隠し、早めに海に飛び込ませて、救助船に救われたので、全員無事だった。
しかし、乗組員たちは、兵士の手伝いをしに来てくれたので、かなりの負傷者が出たと思う。

Q：船はその後どうなったのですか？

A：船は爆発しなかったが、その後、徐々に沈んだ。海は浅かったので、ブリッジの部分は沈まなかったことを、収容された病院に見舞いに来てくれた無傷の仲間から、後に聞いたことがある。

Q：船から離れた後、どのくらいの時間漂流してから救助されたのですか？

A：傷口から出血してたびたび意識を失っていたため、時間のことは分か

らない。

意識が朦朧としてくると、ごく幼かった頃、母親に負われて汽車を見に行ったこと等を次々と思い出し、周囲が明るくなるような感覚があった。同じ船のボーイが、私の頭を船のブイに載せ、時々、私の頭を叩いて「兵隊さん、眠るなよ」と声をかけながら泳いで、近くの無人島まで連れていってくれたらしい。(しかし、父は命の恩人であるこの乗組員の名前も知らず、この人のその後も分からないとのこと。軍隊での人間関係の非人間性を痛感します)

この島に忠洋丸のボートが救助に来てくれた。その時すでに、重症 1 人、死体 2 人を積んでいた。この重傷者は発狂していて、私の左大腿の出血している傷口を見ると、いきなり食い付いて、私の脚の肉を食べた。仲間がすぐ引き離してくれたのだが、その傷口は他の傷に比べて、とてつもなく大きくなってしまった。

救助されたボートは、船長以下高級船員達で島伝いに敵機を避けながら進んでいた。港に着いたのが日暮れ時、そこからトラックで山上のパラオ第 123 兵站陸軍病院に収容された。包帯交換 50 ヲ所余で、一番手間がかかるため、処置はいつも後回しにされた。

ここに入院中にも空襲に遭ったことがある。この時は、看護婦さんが防空壕に避難させてくれたが、壕の一番奥に運ばれたため、終わってから迎えに来てくれたときに 2, 3 人取り残されてしまった。動くこともできず、声を出しても聴こえず、真っ暗ななか、水も食料もなく、傷口には蛆が湧いた。「このまま死ぬのか」と大変心細く無念に思ったが、幾日か後に「忘れてた、ごめんなさい」と出しにきてくれた。

Q: 兵士 25 人のうち、助かったのは何人ですか？

A: 即死 2 名を含む死亡者は 9 名。私を含む重傷者 4 名、軽症者 2 名、無傷の者

2 名で、他の 8 名 [海軍の兵士] については不明。

Q: 眼を悪くされていた方はその後どうされましたか？

A: この人も病院に収容されたが、結局、片眼を失明したらしい。しかし、その後、また戦場に行ったと聞いている。

Q: この海にはサメは出なかったのですか？

A: 珊瑚礁内なのでサメはいなかった。

以上が父 23 歳時の戦争体験です。この後、パラオの病院から、内地に送還され、名古屋の陸軍病院に長期入院していたそうです。抗生物質が日本で使用されていなかったころのことですから無理もないでしょう。多分、左手が使えなくなっていたために兵士として役立たなくなり、除隊されたのではないかと思います。パラオに行く前には、フィリピンのイロイロ*¹⁴という所にいたことがあるという話や、ここへの往復路のことかどうか分かりませんが、バシー海峡*¹⁵で夜間に船が沈没したため、サメの出る海を泳いだという話も聞いたことがあります。

1994 年当時、高校生だった私の息子は、祖父の手記を読んだ時、「家中でおじいちゃん 1 人だけ、海外に行ったことあるんやなあ。それも、飛行機にも乗らんと、パスポートも持たんと」と言ったのを思い出します。委任統治領が植民地扱いだったのなら、パスポートなしで往来できたのかもしれませんが*¹⁶が、その後、自衛隊の海外派遣という話を聞くたびに、私は自衛隊員 1 人 1 人がパスポートを携行しているのか、気になります。

これを書いた数年後に、私がプレゼントした中島敦の『南洋通信』、加東大介の『南の島に雪が降る』を父は喜んで読んでいました。2010 年 8 月、父の 90 歳の誕生日に、私がパラオ諸島の最近の写真集を持って見舞いに行ったときには、父は「あの海はきれいだったよ。ああ、もういっぺん、見たいなあ。」と、顔を輝かせました。それで、「元気になったら、一緒に行きましょう。今度は飛行機で。」と約束したのですが、それは実現しませんでした。

おわりに

父は身長 160cm くらい、痩せ型で運動能力も低く、さらに、少年時よりひどい近視でしたから、「こんな者にまで召集令状が来るくらいだから、報道されているほど、日本が戦勝を上げているのではないだろう。とても生きては帰れないだろう。」と思ったそうです。

最近、大岡昇平の戦争小説集を読みましたが、35 歳で家族もあった氏

も同じ昭和 19 年、フィリピンのミンドロ島に派兵されたときは、「これが祖国の見納めになるだろう」¹⁾ と思ったそうで、こういう感覚は年齢・学歴・経験などによらないのだろーと思ひます。また、同じ本の中で、軍から支給された物は「南方用のものであった。すべて新品であったが、帯革が布製なら靴は鮫皮というふうに…著しくちゃちであった」²⁾ と書かれています。「野火」には戦争によって発狂する人が描かれていますし、「レイテ戦記」には、連合艦隊が全く戦わずにレイテ島の東海上を航行しただけだったことが記載されています。こうして連合艦隊主力艦艇に見捨てられた海域で、捨て身の戦いを強いられた多数の兵士が居たこと、体重の何パーセントかは、戦争で受けた砲弾の破片だった人間がいることを知ってもらいたいと思ひます。庶民にとって戦争とは、こういう人間を作ることには他ならないことを認識していただきたいです。

この原稿を作成中に私の大学院の先輩が、遠縁の船舶模型製作者に問い合わせしてくれまして、「戦没した船と船員の資料館」で忠洋丸のことを調べて下さいました。名村造船で造られ、灰色一色に塗装されていたそうです。この資料館には、それらしい船が攻撃を受ける写真も残っています。パラオ空襲では、23 隻が同時に沈み、これは、その 2 ヶ月前、1 月 17-18 日のトラック島空襲の犠牲船 32 隻に次ぐ大被害だったそうです。忠洋丸乗組員の死者は 12 名ということも判明しました。陸軍兵士の戦死者は 9 名ですから、それを上回る民間人が死亡していたわけですね。確かに兵士は 17 名中 9 名、船員は父の記憶では 30 名くらいということですから、死亡率は兵士より低く、兵士の方が危険な仕事をしていたことが伺われますが、この人達には国から何の手当も支給されなかったのでは、と思うと納得できません。戦時中の民間商船の被害状況については、「海に墓標を」という本が出版されています³⁾。

インターネットで「忠洋丸」を調べると、「日本の軍用貨物船、全長 89 m、船幅 12.4 m、1941 トン*¹⁷、1943 年東洋汽船の中級サイズ」という情報が出てきます。これは、「パラオの有名な沈船のひとつで、コロール島からスピードボートで 5 分の水深 40 m にあるダイバーの潜水目標」らしいです。ここでは、軍船の残骸は、色鮮やかな熱帯魚の群れと同等のようです。しかし、「4 つの弾薬箱があり、不安定で爆発の危険があるため、触れないこと」という注意書きも付されていました。

「戦争はテレビで見るもの」と言う人もいる現在、沖縄の置かれている状況や、原発事故後の福島を考えた時、少数の弱者に不都合をしわ寄せ

せする、という社会の構造は、昭和 19 年と比べて変化したのだろうか？と暗い気持ちになるのは私だけでしょうか。憲法 9 条のお陰で、この 67 年日本は戦争という行為を避けることはできましたが、戦争に直結していくような社会構造は今も存在し、ひとりひとりが良心に従って生きることができる社会にはなっていないことを痛感します。

謝辞 全身レントゲン撮影とその画像処理にご協力頂いた、上山病院および国立和歌山病院・放射線科の皆様と同内科・尾鼻正弘医師、忠洋丸の情報をお寄せ下さった佐藤明雄氏と落合滋子氏、神戸市の「戦没した船と海員の資料館」の大井田孝氏に感謝いたします。

文献

- (1) 大岡昇平「靴の話」『大岡昇平戦争小説集』（集英社文庫）44 頁。
- (2) 前掲書、11 頁。
- (3) 中元輝夫『海に墓標を』（文芸社）2011 年。

注釈

- * 1 戦時標準船は A~F があり、D 型船はほぼ中級で、もっと小さい E,F というのもありました。
- * 2 当時、米軍には空軍はなく、これは、アメリカ「陸軍航空軍」のことらしい。
- * 3 こんな大きなものはこの程度の船には装備できないので、これは、3 インチ（75mm）の間違い。
- * 4 進水は昭和 18 年 11 月神戸。この日付けは大阪で竣工した時のもの。
- * 5 港内を含めてパラオ周辺で、というのが正確な記述。
- * 6 船首が陸軍、船尾が海軍だったのではないか、というご指摘もありましたが、このままにしておきます。父の海軍装備や兵士の記憶は少なく、あいまいでしたが、陸軍についてはしっかりしていました。
- * 7 アッツ守備隊は昭和 18 年 5 月 29 日に全滅しているので、ここは「北方四島または樺太」の間違い。当時この事実は、一般に知らされていなかったと考えられる。

- * 9 この輸送船団記録は見付かりません。
 - * 10 被害を受けた船の装備を修理する工場としての船。
 - * 11 零式水上機のこと。機体の下部には車輪ではなくフロートが付いていて水上を滑走した。
 - * 12 当時、海軍と陸軍で互換性のあったのは、25mm 砲弾。
 - * 13 レントゲン写真からも左の方に多くの砲弾破片が見付かることから、受傷時は船尾に向かった姿勢だったと推測される。
 - * 14 パナイ島の地名。
 - * 15 ルソン海峡のうち、台湾側の岬とフィリピンのバタン諸島の間。太平洋戦争後半は米軍潜水艦が多数配置され、日本の輸送船を沈めたため、「輸送船の墓場」と呼ばれた。
 - * 16 当時は日本の領土とされていたので、当然、パスポートは不要でした。
 - * 17 トン数の下 2 桁は誤差範囲。
- * 1～14、16、17は大井田孝氏のご指摘により、著者が作製しました。

著者のプロフィール

島影美鈴（しまかげ・みすず）

1947年生まれ、医学博士

EB ウイルスによるヒト癌、および癌抑制遺伝子の研究

著書に『研究難民』（ウインかもがわ、2010年）

2013 年 2 月 5 日

日本科学者会議 JSA e マガジン編集委員会

The Japan Scientists' Association (JSA)